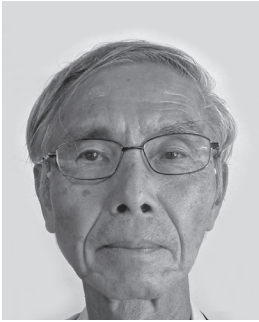


福井での田舎生活（農林業、地域活動、観光ガイド）

奥山 悦男（1973（S48） 理化）



大学で化学を学んだ関係で、大阪に本社のある某化学メーカーに就職し、定年退職後の平成23年に、父祖の地である福井県越前市大虫地区に夫婦で引っ越し、両親との同居生活が始まりました。実家は代々、農業・林業を営んでいました。手の掛かる田んぼは人に貸し、山の木の手入れや、畑で自分が食べたい野菜を作り、夏耕冬読（晴耕雨読ではありません）の生活を行う予定でした。ところが、父が加入していた農事組合の組合員資格を受け継いだため、農事組合が耕作する水田で米・大麦・そば栽培に従事することになり、年中無休で農作業する生活になりました。



いちほまれ田植え（福井新聞 2018年5月16日の記事転載）
福井県が開発したポストコシヒカリ「いちほまれ」を当農事組合が栽培認証を受け2018年に初めて田植えしました。右側が私です。

越前市に引越した頃、近所の人からこう言われました。「何もないしょうもないこんな所に、何が楽しくて引っ越したのですか？」びっくりしました。耳を疑いました。政府は地方創生・地方活性化を謳い、地方の県市町村では、観光人口・関係人口・定住人口を増やそうと躍起ですが、私に言わせると、地方活性化させるためには、地域住民が「何もない所」と自虐的にならず、「自分達が住んでいる所は、日本で一番素晴らしい所なのだ」という誇り・気概を持ち、他地域から来た人たちに、

土地の素晴らしい自然・歴史・文化を伝えるようにならなければいけないと思います。地方には豊かな歴史・自然があります。私は引越し前から越前市の自然・歴史をそれなりに学んでいましたが、この地域のことを更に学ぼうと思い、地域の郷土史クラブに入ったり、地域の自然観察会を立ち上げたり、地区文化祭や公民館等いろいろな場面で地域の歴史・自然を発表しています。

私が関西に住んでいた頃、一番嫌いな季節は「夏」でした。朝からクマゼミの騒音がうるさいので、窓を閉めクーラーをつけていました。今、福井に住んで一番好きな季節は「夏」です。セミの鳴き声に癒されています。7月初めにニイニゼミが鳴き始め、その後、ヒグラシ・アブラゼミ・ミンミンゼミが鳴き出し、8月初めからツクツクボウシが鳴きます。8月初め頃、午前中はミンミンゼミ、午後はアブラゼミ、夕方からヒグラシが鳴き出し、時刻に関係なく一日中ニイニゼミ・ツクツクボウシが鳴いています。夕方、薪ストーブ用燃料確保のため薪割りをしていて、ふと見上げると西の空が夕焼けで真っ赤に輝き、山がシルエットになり、ヒグラシの鳴き声を聞くと、思わず目頭が熱くなります。そして思うのです。「生きてきて良かったナ」と。関西在住の自然大好きな仲間達に、ある旅行企画書を出しました。我家で何もせず、朝から一日中ビールを飲みながら、セミ鳴き声を聞くというものです。仲間達は「いいですね。何もしない究極の旅行ですね」でも結局旅行は成立しませんでした。何もしない、ただ寝転んでビールを飲むだけの旅行に罪悪感を覚えたようです。大阪の夏、35℃を越えた時はクーラーが無いと生活できませんが、当地では、クーラーが無くても、窓を開ければ、田舎の35℃の気持ち良いそよ風が昼寝をしている私の身体を包んでくれます。

私は県外から来る方々に、いろんな所（自然コース・歴史コース・文学コース）を案内し、その季節で一番美味しい料理を紹介し、「福井県は幸福度日本一」を実感して頂くように心掛けています。冬に来られたお客様には「越前海岸の水仙群落」を案内し「越前がに」を賞味して頂いています。最近、福井市（旧・越廼村^{フシノムラ}）越前海岸の松田食堂の「せいこ蟹井」を発見しました。その店の「松田せいこ井」は絶品です。地元のいろんな情報を集め、県外客

の満足度を高めようと日々学んでいます。昨年（令和2年）は、NHK大河ドラマ「麒麟がくる」関係で、明智光秀が越前国に住んでいた頃の関連の地（坂井市・称念寺、一乗谷朝倉遺跡、福井市東大味町・明智神社）を案内し、好評でした。

農作業は、以前と比べれば機械化されたとは言え、基本は肉体労働です。以前は、夕方に泥まみれ・汗まみれで帰宅後、風呂に入り、ビールを飲んだら、ボタンキュー。翌朝目が覚めたら、前日の疲れが取れ、元気印で農作業に出ていました。しかし、加齢と共に疲れが残るようになりました。70歳になったら、農事組合の第一線から離れ、農作業は平日の半日だけ。土日は休日。60歳代は農業中心の「第2の人生」。70歳からは、山仕事中心の「第3の人生」を思い描いていました。ところが、70歳になった昨年（令和2年）、1年近く空席になっていた大虫公民館館長就任依頼を受け、4月から館長を勤めることになりました。就任した途端に新型コロナウイルスの関係で、公民館が閉館となり、6月からようやく条件付きで業務再開となりました。地域のいろんな行事（地区体育祭、納涼祭、文化祭、敬老会等）が全て中止になりました。そのような中でも地域を何とか盛り上げたいとの思いで、地域の自然・歴史を謳った「大虫ふるさとかるた」作成を企画しました。昨年6月に地区全戸に読み札依頼のチラシを配布し、350首集まりました。選考委員会で46首（あ～ん）を選び、地区内で絵の好きな方々・団体に絵札作成依頼し、今年（令和3年）2月によりやく完成しました。そのことが話題となり、地元の丹南ケーブルテレビで放映されたり、福井新聞に掲載されました。



大虫ふるさとかるた（福井新聞2021年4月15日の記事転載）大虫公民館の階段に「大虫ふるさとかるた」A3サイズ46枚を掲示しました。

コロナ後に、大虫小学校体育館での「小学生かるた大会」を企画しています。6月に大虫小学校3年生の「ふるさと学習」の授業時間に、私を含む大虫郷土史クラブメンバーが「ふるさとかるた」の中で地元歴史に関係した10首を紹介しました。



2021年6月7日大虫小学校3年生ふるさと学習の授業風景「大虫ふるさとかるた」を使って、地域の歴史を説明しました。

「かるた」は子供たちが遊びながら地元の自然歴史を学べるツールになることを確信しました。8月下旬にNHKが「大虫ふるさとかるた」取材に来て、9月のローカルニュースで放映されることになりました。

越前市は人口8万人の地方都市で、外国人が約5千人住んでいます（人口比6.3%）。彼らのほとんどは日系ブラジル人です。私が住む大虫地区にも多くのブラジル人が在住し、今年（令和3年）4月に大虫小学校に入学した1年生50数人の内、ブラジル人が11人でした。入学生の2割が外国人なのです。私は外国人に日本語を教える研修を受けていましたが、今は多忙なので、外人への日本語指導を控えています。でも公民館に来るブラジル人が多いので、挨拶だけでもポルトガル語で対応しています。「ボアタルデ（こんにちは）」「チャオ（さようなら）」「オブリガード（ありがとう）」。公民館での「放課後こども教室」に参加しているブラジル人小学生を迎えに来る母親達に「ボアタルデ」と言って手を振ると、彼女達は「こんにちは」と言って答えてくれます。

当地へ来てから、10年間農業を行なって感じることもあります。個人農家の担い手は70歳以上の高齢者ばかり。息子たちは農業に関心を示しません。私が農業を始めた時のモットーは「①楽しい農業、②楽な農業、③儲かる農業」でした。①楽しいか楽しくないかは人生観に依ります。②肉体労働でしんどいですね。個人差はありますが、農業は70歳が限度と思います。③しんどくても儲かれば農業に魅力を感じるとは思いますが、現実には厳しいです。1次産業（家内生産）としての農業は5年以内にほぼ壊滅するでしょう。その対応策として政府が策定したのが、2次産業（工場生産）としての農事組合を立ち上げ、農地集積・大型化・機械化・コストダウンし、競争力をつけるというものでした。私が所属する農事組合でも金融機関から融資を受け、田植え機・コンバイン・トラクター

等を揃えましたが、借金返済に四苦八苦です。コロナ禍の関係で外食向けの米が売れず、個人消費者は米離れ状態。米価の安値傾向に頭を抱えています。山の近くの中山間地で耕作しているので田んぼが狭く生産性が悪いというハンディがあります。一番の問題は労働力確保です。定年退職後の60歳代の組合員が一番期待されています。私があるの典型です。しかし、定年延長で、今では、70歳定年が企業の努力目標になっています。70歳の定年退職者は農業をする体力が無く使い物になりません。定年延長が2次産業としての農業を壊滅させてしまうのではないかと危惧しています。労働力確保のため、ハローワークを通して社員募集し、3人採用しています。月給制で、支出の中での労務費が大きくなるばかりです（組合員の農作業は時給支払い）。

今年（令和3年）4月から2年間、町の区長になり、当て職として、自警消防隊長・農地水環境代表、そして地区区長会副会長・地区振興会副会長になり、民生委員もしているの、70歳代前半は地域活動中心の「第3の人生」になりそうです。山仕事中心の夏耕冬読の「第4の人生」は75歳以降になりそうです。しかし、その頃に山仕事出来る体力があるでしょうか？体力維持が課題です。

高校・大学時代に学生オーケストラでチェロを弾いていた関係で、定年退職後に念願のマイチェロを購入し、地元の弦楽アンサンブルで練習しています。越前市文化センターでの越前市シニアクラブ連合会主催の演芸大会で大虫地区代表としてチェロ独奏しています。



チェロ独奏（越前市文化センターにて）。シニアクラブ連合会主催演芸大会リハーサル（2017年7月11日）。武生国際音楽祭会場となっている所でのチェロ演奏はあこがれでした。

他に地元混声合唱団でテノールを担当しています。残念ながら、コロナ関係で、活動停止状態です。コロナ後の活動再開を楽しみにしています。

同居していた父は4年前（平成29年）に他界しました（享年91歳）。父は昭和19年に旧制中学卒業後、

陸軍船舶特別幹部候補生に志願入隊しました。モーターボートに爆弾を積んで敵艦に体当たりするという「特攻隊」でした。小豆島での訓練が終わり、

広島に移動し、出撃命令を待つ日々を送っていた頃、昭和20年8月6日朝、点呼を受けていた時、左方向に大閃光を感じ、大音響とともに、猛烈な爆風が襲い、木造兵舎が大揺れしたとのこと。対岸の広島から舟で多くの傷病された人たちが避難して来ました。兵隊達は救助のため広島に向かいました。当時18歳だった父はその時地獄とはこのような事なのかと感じたそうです。父は直接被爆していませんが、被爆地へ入ったことによる入所被爆を受けたことで、「被爆者手帳」を持っていました。父の死去後、被爆者手帳を厚生労働省に返却しましたが、私は被爆二世として毎年健康診断を受けています。父死去の翌年（平成30年）広島市・平和記念公園での原爆死没者慰霊式&平和祈念式に福井県被爆遺族代表として夫婦で参加しました。安倍首相（当時）の挨拶の時の実況中継と昼の全国ニュースで、父の遺影を持った私の姿が大きく放映されたそうです。その後、父の兵舎跡地である坂町の海上保安本部へ行き、岸壁に立って父の遺影を掲げ、当時18歳の父の姿を思い浮かべていました。一泊二日でしたが一生の思い出となる旅でした。

母は現在93歳。要介護5で施設に入所しています。会いに行っても私が誰だか判別出来ず、会話も出来ない状態です。人生100年と言われていますが、母の姿を見る度に、このような高齢者になりたくない。健康長寿で歳をとりたい。そのためにはどうすればよいのか。そういう意味で母は貴重な存在です。母は施設で寝たきりの生活ですが、苦勞してきた人生を思うと、今が一番幸せなのかもしれません。税金の無駄遣いかもしれませんが、未永く生きて欲しいと思っています。

私は、福井県出身の両親の元で、父の仕事の関係で大阪で生まれ、小学校を4回転校し、千葉市で小学・中学・高校を卒業し、札幌の大学に進学し、就職後は主に関西で過ごし、定年退職後は福井県の実家で過ごし、被爆二世という運命を背負い、それなりに大変な人生だったけれど、普通では経験できないような面白い人生を送ってきたなと思っています。残された人生を死ぬまで元気に楽しく、邁進していくつもりです。

<越前市の文学関係紹介>

①万葉集巻十五に越前国に流刑された中臣朝臣宅守ナカノミヤノヤカヒと奈良に残された狭野弟上娘子サノノノミトがミノトメの間で交わされた63首の相聞歌を記念して、市内・味真野地区に万葉館があります。元号が「令和」に変わった直後は、県外から団体バス旅行者が大勢来られました。

②平安時代に、藤原為時が国司として越前国に赴任した時、娘の紫式部も同行しました。結婚のため京

都へ戻るまでの1.5年間を国府の在った越前市で過ごしたと云われています。結果として、紫式部が京都以外の地に住んだのは越前市だけでした(源氏物語を執筆するために石山寺に数カ月籠ったのは別として)。市内に広い紫式部公園があり、その中に「紫ゆかりの館」があり、紫式部と越前市との関係が分かります。平成13年に吉永小百合主演の映画「千年の恋ひかる源氏物語」が公開されました。それを記念して吉永小百合さんが越前市へ来られ、手植えされた松の木が公園内にあります。



紫式部公園 写真真ん中の山は、越前市で一番高い日野山(別名:越前富士、標高795m)。日野山を借景にした公園です。

③いわさきちひろは母の仕事(教師)の関係で大正9年に越前市で生まれました。住んでいたのは3カ月間だけでしたが、それを記念して「ちひろの生まれた家記念館」があります。ちひろの作品を常時見ることが出来ます。

④かこさとしは父の仕事の関係で越前市に生まれ7歳まで当地に住んでいました。市内に「かこさとしふるさと絵本館」があります。かこさんが描かれたいろんな絵本を見ることが出来ます。市内の中央公園は「たけふ菊人形」会場です。そのなかにかこさん監修のいろんな仕掛けのある「だるまちゃん広場」があります。



中央公園・だるまちゃん広場 右の山は、越前市のランドマーク「日野山」。左の山は「村国山」。その間の建物は「越前市文化センター」。写真から見えない右側に「菊人形」会場があります。写真全体が「だるまちゃん広場」でいろんな仕掛けがあります。

いつも家族連れでいっぱいです。関西に住む孫たちが遊びに来ると中央公園へ連れて行きます。

孫たちは喜んで一日中遊んでいます。福井県内で日帰り旅行客が一番多いのは、東尋坊や恐竜博物館(勝山市)を押さえて、この中央公園です。

⑤俵万智さんが小学校~高校卒業まで、父の仕事の関係で越前市に住み、福井市内の高校へ福井鉄道で通学していました。福鉄「北府駅」中の「福井鉄道ミュージアム」に、俵万智作「よつ葉のエッセイ」に登場する通学時の思い出が掲示されています。尚「北府駅」は登録有形文化財に登録されており、かつてソフトバンクCMで樋口可南子と白い犬が登場した駅です。



北府駅内・福井鉄道ミュージアム 福井鉄道・北府駅内にあります。写真右奥に俵万智作「よつ葉のエッセイ」中の、高校時代の通学時の思い出の文章が掲載されています。



福井鉄道・北府駅 左窓奥に登録文化財の登録証が掲示されています。写真撮影した時(7月中旬)あちこちに風鈴が飾られ、音色が心地よかったです。

他に、越前和紙・越前漆器・越前打刃物・越前箆・越前焼等の伝統産業や、福井鉄道・南越線跡や福井鉄道・鯖浦線(セトセ)跡。そして、今庄駅⇔敦賀駅間のJR旧北陸線の線路跡や11のトンネルの鉄道遺産があります。尚、今庄⇔敦賀間の旧北陸線跡は日本遺産にも指定されており、この冬(令和3年)日本遺産&鉄道遺産案内ボランティア研修を受けました。

多忙ですが、連絡頂ければ、時間をやりくりして、越前市内・周辺を案内いたします。観光人口・関係人口が少しでも増え、地域活性化に少しでも貢献できれば本望です。私の連絡先は事務局に問い合わせてください。お待ちしております。